

関西の笑い

ーパネルディスカッションー

ゲストパネリスト：藤田 曜 氏

パネリスト：浦 光博

広瀬 依子

コーディネーター：横田 修

○コーディネーター これからパネルディスカッションを「関西の笑い」というテーマで始めさせていただきますと思います。

本日のゲストは、おじいさまが秋田実氏ということで、先ほど広瀬先生からもご紹介がありました藤田曜さんです。研究員の浦光博先生と広瀬依子先生にもご参加いただきます。

さて。関西の笑いということで、どのあたりから入らせていただこうかと。新参者の東下りなものですから、関西の笑いについて、知らないことがたくさんあるのですが、まず、恥ずかしながら秋田実さんを存じ上げません。秋田実さんをご存じの方、よろしければ・・・(客席に挙手を促す)おう、すごい。

○藤田 ありがとうございます。

○コーディネーター ほぼ100%ですね。

○広瀬 秋田実先生は、実はNHKの朝ドラのモデルにもなられたんですね。『心はいつもラムネ色』です。もしかしたら見たという方がいらっしゃるかもしれません。

○コーディネーター ご覧になった方、いらっしゃるですか(客席に挙手を促す)。あっ、結構挙がりますね。

○藤田 うれしいですね。

○広瀬 プチ情報でした。

○コーディネーター 上方漫才の父だということで、いろいろな文献等にもお名前は沢山出てきます。藤田さんは、「笑の会」という、確かお笑いの会のようなものに所属されていますよね。

○藤田 はい。そうです。

○コーディネーター その「笑の会」というのも、秋田実氏がおつくりになった会だとか。漫才作家として、何か影響は受けていますか？

○藤田 まず、秋田実という名前は、たぶん皆さんのほうが知っていると思うんですね。祖父が、



亡くなったのが1977年なんです。僕は3歳なんです。ぶっちゃけて言いますと、おじいちゃんについてというのは本当にもう、いつも言っているのですが、ワンシーンしかなくて、みたらし団子を持って食べているシーンしか僕は覚えてないんですね。3歳で。

中学校か小学校のときに、なぜかNHKの収録現場に行って、藤谷美和子さんという女優の方がいて、何でここに僕はいるんだろうとずっと思っていたんですね。後々、この業界は僕が21か22歳のときぐらいに入ったんですけども、そのときに教えていただいたのは「笑の会」の先生であったり、あと、芸人さんから「うちのおじいちゃんがこういう人だったよ」というのを後で教えてもらったという情報の方が多いんですね。だから、実際は3歳ぐらいで、おじいちゃんは孫に全部色紙に名前を書いていたそうなんです。生まれたら何か教訓みたいなのを。ただ、僕だけ、もうなかったんですね。要は、親類の中でも一番下なんです。そのときに、もう祖父の体の調子もあまり良くなかったんで、そういう色紙もなく、僕だけ、ちょっとはみ出した感じになっていたんです。記憶がなく、他の親戚のいとことかはみんな思い出はあるのですが、実は僕はもうまったくないと。なのに、こういう業界に入ったというのが、ちょっと自分でも何でかなというぐらい不思議に思っているときがあります。

○コーディネーター なるほど。本当に、3歳では仕方ないですよ。

○藤田 そうですね。3歳では本当に何も覚えていなくて、お葬式も実は出ていなくて、後々、預けられた人がちょっとよそ行きの格好をして、こっそり連れていってくれたというのは後で近所のおばちゃんに教えてもらったのですが、それぐらい本当に思い出というか、記憶が全然ないですね。

それで、さっき、「笑の会」と言われたところでいうと、実はこれもちょっとお話がありまして、もともと僕は、父親がアウトドアのそういうキャンプとかをやっているんで、アウトドアのほうで、椎名誠さんという作家さんがいらっしゃるんですけども、ああいうのにちょっと憧れていたときだったんですね。

それで、大学に行っているときに、母親が。母親は童話を書いているんですね。その母親が先ほど出ました「笑の会」。うちのおじいちゃんがつくって、一時休止していたんですけども、あらためて読売テレビが漫才作家を育成するという場をつくろうと。演芸のプロデューサーの方の有川さんという方がいらっしゃいまして、その人にもう一度立ち上げていただいて、そこは作家とプロの芸人が一緒にネタをつくって行って、学んで大きくなっていこうというような会なのですが、そこで初めて母親のほうに応募したんです。新聞に載っていて、応募を出したんです。

その出す前に、僕に「この台本を書いたんやけど、どうや」と言われまして、僕から見れば母親の書いたお笑いなんて面白いわけがないんですよ。「面白くないよ」と。

○コーディネーター すごく大事なところですよ。

○藤田 はい。言ったら、「あんた、書いてみいや」と。やっぱり童話作家をしていますから、プライドがあるんですね。「書いてみいや」と言われまして、ちょうど忘れもしないのですが、大学



のテスト中だったのですが、その締め切りが7月10日やったんです。僕の誕生日やったんです。でも、この締め切りをちゃんと守らなければ、今後先も何もうまいこといけへんのちゃうかというぐらいプレッシャーが掛かりまして。

当時、コンビニ、サンチェーンとかいうのができていた時代なのですが、ローソンとサンチェーンというのがあって、そのテーマで台本を書いたら、「笑の会」のメンバーに僕が入らせていただいたというところで、母親は関係なく、僕がそこに入って、今に至るということです。

○コーディネーター ありがとうございます。現在、漫才作家として活躍されている藤田さんから見て、東京と大阪の漫才、東京と大阪の笑いの違いとはどの辺りにあると思われますか？

○藤田 やっぱり、東京はコント55号さんとか、てんぷくトリオさん、ドリフターズとか、そういうような、今で言う、売れてはる人と言うウッチャンナンチャンさんとか、バナナマンさんとか、コントが結構多いなと。やっぱりテレビを意識したキャラづくりが非常にうまいなと思うんですね。

逆に、大阪はそういう無理やりキャラ、似合わへんキャラをすると、お客さんのほうが笑いに目が肥えていますので、そんな無理してという形で受け入れてくれないんですね。

だから、大阪はどっちかという、メッセンジャーさんとか、やすよ・ともこさんとか、中川家さんのように、内面の延長線にある笑いを得意としたしゃべくりがあって、もし、台本を東京の人に書くとすれば、やっぱりコントでキャラクターがはっきりして、動いて、顔の表情で笑いが取れるようなネタを書くかなと。

逆に、大阪ではそういうような顔の表情であったり、そういうキャラに入っというのは、芸人さんらは「ちょっと無理あるわ。これ、やりにくいわ」とよく言われます。その辺の差は、やっぱりちょっとあるのかなと。東京はキャラクターから派生する笑いが得意で、大阪は地の延長。そのものの人の内面の延長で笑いをつくるほうが、爆笑の笑いが取りやすいという気はしますね、違いは。

○コーディネーター まだ関西に越して来て1年半な私は、関西弁で話し掛けてもらう機会が少ないのです。だから、時々関西弁で話し掛けてもらうと、何ともいえない温かい気持ちになります。私が日常で関西の言葉の温もりを実感する瞬間なのですが、今、藤田さんのお話にあった関西の笑いというのは、日常にかなり近いということなのかもしれません。

○藤田 そうですね。漫才コントのときのキャラクターをはっきりと出すというか、あり得ない設定を。大阪では、例えばカフェとかでも、普通やったら、大阪はカフェの中でおばちゃんとかを入れたやり取りのネタを書いたりするのですが、東京の場合はそのままのカフェでいくと受け入れられないというか、テレビ的というか、コントに入っても、イメージとして絵があまりしっかりしないんですね。

そのときに、カフェの前に、例えば、東京は今、マッチョカフェってはやっているんですよ。

○コーディネーター 何ですか。



○藤田 マッチョカフェ。要は、ムキムキの人がカフェをやっているんですね。

○コーディネーター 店員さんがムキムキ。

○藤田 はい。そうです。

○コーディネーター お客様は？

○藤田 お客様はムキムキじゃないです。お客様はムキムキは必要はないので。

○コーディネーター お客様は誰でもいいんですね。

○藤田 はい。店員がムキムキで、こうやりながら、こうやって案内するというのがはやっているのですが、例えばそういうキャラクターであれば、やりやすいですね。こう筋肉をやりながら、オムレツにケチャップで何か描くときでも、ぐぐぐとやるところを筋肉を見せながらやるというような、絵の力で笑かしやすいネタが作りやすいというのは。

ただ、これを、今言ったのは例ですが、マッチョカフェを関西で落とし込んでやろうとしたら「いや、そこまでないやろ。そんなキャラ、要らんやん」と言われるんです。その差というのは、やっぱり東京と大阪の違いなのかなという。「無理やりそんなんでええやん」と言われるんです。「恥ずかしいわ、そんなネタ」と。

だから、通販番組をよく見ていただいたらわかると思うのですが、「へえ、すごいですよねえ」というやつがあるじゃないですか。あれって、大阪のおばちゃんは「うそつけ」と思って見ているんです。

○コーディネーター なるほど。

○藤田 東京は、あれはこのキャラクターを強調させると、それを飲み込んで笑ってくれるんで



すね。そこで、やっぱりうさんくささというのは、大阪はすぐに見抜くんですね。ぱっと見て。「絶対うそやで、あれ。絶対そんな落ちるわけないよな」と言って、最後は買うんですけど。

○コーディネーター 結局買うんですか。

○藤田 買うんですよ。「よかったわ」と言うんですけど。

○コーディネーター よかったですね。

○藤田 でも、ただ、そこがたぶん、通販が一番わかりやすいのですが、あのキャラクターは、東京は受け入れてくれるのですが、誇張すれば。ただ、大阪の場合は、芸人さんはあれの「あんなん、うそやんけ」。もう中川家さんとかがネタでやっているネタがあるのですが、見ていただいたらわかるけど、「うそくさいわあ」目線で笑いにしはるんですが、そうしないと、こなしてくれないとか。そこがちょっとあるかなと思うんです。通販が一番わかりやすいと思います。

○コーディネーター 確かに。関東の人間としては、はいはい、と思いながら見えていますね。突っ込むとかじゃなくて、そういうもんだねと思いながら見えていますね。

○藤田 突っ込む。

○コーディネーター でも、やっぱり買うときは買うんですけどね。

○藤田 結局買うんですよ、あれ。

○コーディネーター でも、買うときは買うんですね。

○藤田 はい。

○浦 ちょっと関係ない話ですが、心理学者なものですから、ずっと論争があるんですね。人をつくるのは遺伝か環境かという話があるのですが、先ほどの話を聞いて、やっぱり遺伝の力って強いなど。

○藤田 いえいえ。

○浦 思いましたね。アウトドアをやっていた方が一発で出して、ぼんと通るとというのは、やはり遺伝子の力って偉大だなとあらためて感じているのですが。

○コーディネーター なるほど。

○浦 そんな話はどうでもいいのですが、今の話は本当にとっても腑に落ちましたね。やっぱり大阪は漫才と日常会話が地続きで、そこから離れてしまうと、笑っていても、うそくさく感じてしまうというのは確かにあるなというふうに、あらためて発見したような感じがします。

○コーディネーター はい。地続きなんですね。

○藤田 漫才は、たぶん大阪のは、お客さんに育てられているということが大きいと思います。もちろん、しゃべくり漫才が発展してきた大阪の文化で、お客さんの野次もあったと思うので。

○コーディネーター どうですか、広瀬先生。

○広瀬 私は今まで、そういう環境で育たれたから今の道に進まれたのかなと思い込んでいたので、ちょっと驚きでした。やっぱり仕事を実際に始められると、秋田先生のお孫さんやねと、いろんなところで言われてはるのでしょうね。プレッシャーを感じられることはございませんか。



○藤田 先ほども言いましたが、3歳ぐらいたったので良かったのかなという気がしますね。やっぱり僕らの上の先生がすごく優しいというか、いろいろ教えていただいたので、そうプレッシャーというのはなく、逆に秋田の孫に生まれて良かったなというのが本音です。それで、おいしい目もぶっちゃけしているんですね。七光りであろうが、何であろうが、全然僕はよくて、おいしい目をする、やっぱり生まれて良かったなと。他やったら、ちょっと嫌やなと思います。

ただ、今ちょうど先ほどもちょっとお話ししていたのですが、祖父の阿倍野に実家があったのですが、今、その家がつぶれて本の整理をしていたんですけども、もともとうちのおじいちゃんというのは、人間が面白いわけではないらしいです。それは母親が言っていたんですけども。なのに、何で笑いをやっていたかという、それは資料を整理していた母が言っていたんですけども、人間的には本当に家でコーヒーとタバコしか飲んでいるところを見たことがないというぐらいで、笑かしたりも家の中ではしていませんでした。

おばあちゃんや母に対しても、そういう笑ったり、ギャグをしたりというのが一切なくて。じゃあ、何をしていたかという、サプライズ好きやったそうです。家から帰ってきたときに「はい、これ、お土産」と言って出すのが好きやって、人を楽しませることが好きで、笑っている顔が一番好きで、それがたまたま漫才だったというだけで。

実はその資料を読んでいると、落語もやっていますし、小説も書いていますし、映画の脚本もやっています。映画に関しては、そんなお笑いなんてなかなか入っていないような、ギャグも入っていないような内容のものでしたし。

○コーディネーター 最初、秋田先生は小説家から始まったと聞きました。

○藤田 そうですね。結局、たまたま人が喜びやすいのが漫才やったという形で、本当に資料を読んでいると、いろんなものをやりたかったという。それが、人を楽しませれば何でもよかったという、サプライズ好きやったという。だけど、それはちょっとうちの家系はみんな、引いているかなとは思いますが。

○コーディネーター 遺伝子ですね。

○藤田 だから、うちの親戚、うちの母親はもっと好奇心旺盛で、打ち合わせをしているときにチンドン屋が来たら、もうすぐに飛んで見に行くんですよ。チンドン屋が来たと言って、あと、救急車もいまだに本当に来たら、ずっと迎え待っているんですよ。鳴ったら、この辺ちゃうかと言って、そこで待っているんですよ。それぐらい好奇心旺盛というか。

○コーディネーター 何だか楽しそうですね。

○藤田 楽しい家ではありますね。

○広瀬 ひとつ、秋田先生のエピソードで、お母さまの童話作家の藤田富美恵先生からお聞きした話を申し上げます。

お母さまが出産されて、まだお子さんが小っちゃい頃のことです。曜さんかどうかはわからないんですけども、まだ本当に赤ん坊で泣いているときに、秋田実先生が家で原稿を書いていらし



た。泣き声が執筆の邪魔にならへんかなと思ひ、気を使ってひやひやしていた。そうすると、秋田先生が「かまへん、かまへん。赤ん坊は泣くのが仕事や」とおっしゃったそうです。秋田先生って本当に温かい方なんやなというのがすごく印象に残っています。

○コーディネーター 先程の浦先生の発表でも、関西の人は周りを楽しませる人が多いというお話がありました。秋田氏自身も関西の土地で育ったということが、そのキャリアの背景にあるんでしょうね。

○藤田 そうですね。その「笑の会」というところで、そのときはまだ、入ったときはアウトドアのほうに行きたかったんです。もちろん、アウトドアでも、みんなで山に登ったりというイベントをしたいなというような感じだったんですね。楽しい。

○コーディネーター アウトドアというのはサークル。何ですか。趣味。

○藤田 父親が日本アルプスとか、そういうのに登るのが好きで、よく椎名誠が好きで、キャンプをやったりするので、僕もそれで行ったんですね。将来的にはそういう仕事がいいなと思ったのですが、さっき言った「笑の会」に入って台本を書いて、実際に1本採用されたんですね。芸人さんに実際に演じてもらって、僕らは後ろで見るのですが、お客さんが笑ってくれたんですね。そのときの一番の感触が、笑顔で帰っていくお客さんに対して言わないのですが、「あれ、僕が書いたんですよ」と言いたくなる気持ちが今もずっとあって、続けていられてるのかなと思いますね。

○コーディネーター 分かります。私は演劇を作ることを仕事にしてまして、大学でも演劇を中心に教えているのですが、お芝居が終わった後に、「あの人、あのキャラクター大好き！」とか言ってお客さんが俳優のところへ寄ってきたりすると、本当は僕が書いたのになーと。何で僕のところに来ないのかなーと冗談で思ったりします。芸能の世界の方、皆さん、あるんじゃないかと思うのですが、その感じですよ。

○藤田 はい、そうです。それです。

○コーディネーター 最後に、お三方へ是非お聞きしたいことがございます。関西の人は周りを楽しませる人が多いところから、関西の言葉、まさに関西弁のお話なんですけど、私が関西に来てから参加したシンポジウムで伺ったのですが、関西の人は服の値段をよく聞くんですよ。「それ、なんぼしたん？」みたいなことを関西の人はちょいちょい聞く。不躰な話に思えるんですが、それは相手を心配してあげてるんだ、みたいなことを聞いたんです。

○藤田 心配。

○コーディネーター 心配。

○コーディネーター そうですか。それは気に掛けてあげてるということだよみたいなことを言っていたんです。これはわかりますか。

○藤田 わからないです。

○広瀬 それはちょっと違うように思います。

○浦 もしかしたら、私はあなたに対して関心を持っているんですよという言葉の表れなのかもし



れないというような意味なのかもしれないですね。

○コーディネーター ああ、なるほど、なるほど。

○浦 べつにそんなことは考えていないですよ。

○藤田 普通に「これ、なんぼなん」と言うね。

○コーディネーター 考えていないんですか。

○藤田 はい。考えていません。

○浦 それがデフォルト。

○コーディネーター ああ。さっきもちょっとお話がありましたよね。考え過ぎちゃいけないというお話をしていましたよね。

○広瀬 はい。

○コーディネーター 私は、「ほちほち行こか」という言葉を聞くと、「どこへ行くんですか?」と必ず言いそうになります。だって「行こか」と言うんだから、それは「どこに?」となるじゃないですか。独り言でも関西の方は行こかとか言うでしょう。他にも、「自分」とかもよく言いますね、関西の人は。「自分、あれやろ」とか。

○藤田 あと、「自分」とかよく言いますね、関西人は。「自分、あれやろ」と言って勘違いされる。

○広瀬 あ、相手のことをね。

○コーディネーター そうそう。「自分」って言ったから自分でしょう?何、それって。何で私に向かって「自分」と言うのか。

○浦 愛嬌ですよ。

○藤田・広瀬 愛嬌。

○コーディネーター 愛嬌。ありがとうございます。なるほど。だから、先程の広瀬先生のお話にもあったのですが、関西弁というのは、言葉の厳密な意味を求めるよりも、その場が温かくなって、きちんと商売ができたり、何かしら関係が持てたり、そのぐらいに捉えた方がよい場合があるのでしょね。

○広瀬 全部が全部そうではないんですけども、そういう役割を持つ言葉は結構あるのではないのでしょうか。さっきも申しましたが、「暑い、暑くない」は、どっちやねんという話ですから、深く考えていたら言えないのではないのでしょうか。

○コーディネーター まだこちらへ来て1年半ですが、これからも関西弁や関西の笑いについて勉強させていただきます。以上をもちまして、第2回笑学研究所公開講座、これにてお開きとさせていただきます。どうもありがとうございました。

(終了)



追手門学院大学 第2回 笑学研究所公開講座

笑う門には福来る

テーマ 関西の笑い

開催趣旨

昨年10月1日に設立した「追手門学院大学 笑学研究所」が「笑う門には福来る」を大テーマに掲げて開催する第2回の「公開講座」です。

第1回は「笑いの効用」をテーマにお楽しみいただきましたが、今回は心理学的視点・文化的視点から「関西の笑い」を考える有意義なひと時を共有できれば幸いです。

プログラム

17:00 開演

17:10 講演 笑いの心理学

[講師] 浦光博 笑学研究所所員

18:00 講演 大阪の笑いとは文化

[講師] 広瀬依子 元『上方芸能』編集長
笑学研究所客員研究員

19:00 ディスカッション

[ゲストパネリスト] 藤田曜氏 (漫才作家、お笑いライブを中心に台本制作& 映像制作をしながら活躍中、祖父は秋田笑)

[パネリスト] 広瀬依子、浦光博

[コーディネーター] 横田修 笑学研究所所員



浦光博



広瀬依子



藤田曜氏

日時 2016年12月22日(木) 17:00~19:30 (開場16:30)

会場 茨木市立男女共生センター ローズWAM 地下2階 ワムホール

申込み方法

FAX: 072-665-5034 または メール: showgaku@otemon.ac.jp ※申込み詳細は、裏面をご覧ください。
※会場にて一時保育がご利用頂けます。ご希望の方は、お申し込み時にお問い合わせください。(一時保育申し込み受付 12月5日まで)

定員150名
参加無料

申し込み先着順
定員になり次第
締め切らせて頂きます。

主催 追手門学院大学
後援 茨木市、茨木市教育委員会

お問い合わせ

追手門学院大学笑学研究所
TEL: 072-641-9723(研究・社会連携課: 平日9:30~18:00)
FAX: 072-665-5034 メール: showgaku@otemon.ac.jp



想像もしなかった自分史がはじまる
追手門学院大学